

すべての子どもたちに笑顔と自信とつながりを ～音楽教育活動を通して出会った子どもたちから～

枝重 美香

(14-1, バヌアツ, 小学校教諭, 草津市立老上小学校)

1、はじめに

学校へも通えず、お腹をすかせて涸れた地面に座り込んでいるやせ細った子どもたち

・・・小学生のときに見た映像が頭から離れず、いつか現地に行って自分のできることをしたいという思いがかない、2002年度から始まった「現職教員特別参加制度」に第一期生として参加させていただくことができました。派遣国は大洋州に位置するバヌアツ共和国。そこで音楽教育を中心とした活動をしていくことになりました。

日本とは大きく異なった生活や文化はとても楽しく興味深いものでしたが、教育への考え方や教育制度の違いには戸惑うことが多く、一体何のために来たのだろうと悩みながらの活動でした。しかし、子どもたちの笑顔に励まされて初心に立ち戻り、自分のできることを精一杯やっと思いこうと思えることができました。そこでの模索しながらの活動を報告させていただきたいと思います。

2、バヌアツ共和国の概要

(1) 自然を生かし、自然に生かされた生活

オーストラリアの東、南太平洋に浮かぶ82の島々からなるバヌアツ共和国はすべての島を合わせても新潟県とほぼ同じ面積で、人口はおよそ19万人という小さな国です。首都や州都など一部の地域には電気や水道が通り、先進国から輸入した工業製品を使って生活しているところもありますが、ほとんどの地域では雨水を溜めて飲み、薪を拾って食事を作り、バナナやココナツの実、葉などをうまく利用して生活に必要なものを作り出すというような自然と共存した生活を営んでいます。美しい海に囲まれた緑豊かな国なので、

色とりどりの果物など一年中食べ物に困ることはなく、人々はたいへんおおらかで陽気に暮らしています。

(2) バヌアツの子どもたち

自然を生かして生活していくことは、人々の協力なしにはありえません。子どもたちもその一員として、家族のために仕事をします。蒔き拾いや水汲み、洗濯、数キロメートル離れた畑から作物を運んでくることなど、子どもとはいえかなりの重労働を課せられます。

酋長制の残るバヌアツは厳しい縦社会なので、子どもは大人の言うことに従い、家庭や地域の中で生きるすべや社会のルールを学んでいくのです。

そのため、子どもたちは幼いうちからブッシュナイフを使って生活に必要なものを作り出

すなど、たくましい生活力を身につけていきます。しかし、大人の言うことに黙って従うことが当然とされているからか、自分の思いを表現することは苦手で、人前では萎縮してしまう姿を目にすることがたくさんありました。正面を向いて話ができない、大好きな歌も下を向いてしか歌えず、前に立ってもみんなに背を向けてしまう・・・こんな姿をなんとかしたい、もっと自信をもって表現できるようになってほしいという思いで活動に取り組んでいきました。

(3) バヌアツの音楽

カスタムソング

バヌアツは村や島ごとの伝承文化が色濃く残り、生活に大きな影響を与えている国でもあります。世界的に知れ渡ったバンジージャンプもその一つですが、他にも村独自のお祭りや儀式があり、そこで代々伝わっている歌や踊り、タムタムという木彫りの太鼓によるリズムなどは大変すばらしいものです。しかし、これらはすべて口承文化であるため、伝わっていく過程で変容してしまうことや、また、新しい音楽の流行などによって若者が離れていく傾向にあることも危惧されています。

教会での合唱

約9割の人たちがキリスト教徒であるバヌアツでは、ことあるごとに教会に集まり、讃美歌などを合唱しています。伴奏する楽器がなくても人々は美しいハーモニーで歌うことができます。各家庭でも食事の前に感謝の気持ちを込めて歌ったり、団欒のひとときに家族そろって歌を楽しんだりするなど、人々の生活からは歌を切り離すことができないのではないかと思います。

ストリングバンド

どこから伝わってきたのかはわかりませんが、弦楽器を中心としたストリングバンドが流行し、各島でも自分たちでギターやウクレレ、ベースなどを作りだし、それらを演奏しながらリズムよく歌をうたうことが楽しまれています。子どもたちも大好きで真似をして歌ったり、木を削って自分たちで楽器を作り、感覚だけで音を合わせて演奏を楽しんだりしていました。人々のものを作り出す力と耳のよさにはいつも驚くばかりでした。

学校での位置づけ

このように日常的に親しみ、愛されている音楽ですが、学校では「芸術」の中の一つで、教科としては成り立っていませんでした。音楽は学ぶものではなく、遊びであるものだと考えられていたこと、楽譜が読めないことや楽器が演奏できないなどの理由で先生たちが教えようとせず、学校で子どもたちが音楽を学ぶことはほとんどありませんでした。

3、任地での活動

首都から約100キロメートル離れた島の小学校に赴任した私は、1～6年生と併設する中学校の3年生までの全9クラスの音楽科の授業を受け持つことになりました。前校長が日本の学校を訪問した際、そこでの音楽科の授業に感銘を受けて指導者を要請したそうで、私はその学校の二代目の隊員として活動することとなりました。

(1) 新しい曲の指導

前任の方が授業にふさわしいと思えるほとんどの曲を全学年に指導されていたため、初めのうちは既習の曲を二部合唱にしたり、歌いながら手遊びやリズム打ちができるようにしたりするなどアレンジを加えて楽しめるようにしていたのですが、それでは間に合わなくなってきました。教材を探そうにも書店やCDショップがあるわけもなく、自分で作り出すしかありません。リズム打ちをするのにも打楽器がなかったため、植物の種を集めてきてシェーカーを作ったり、ココナッツの殻をたたいて音を出したり、砂浜に落ちているコーラルなどでもおもしろい音がでないかと試してみたりしました。

また、歌については子どもたちが好きそうな日本の曲をビスラマ語というバヌアツの公用語に訳して紹介したり、自分で作詞作曲して指導したりもしました。赴任して間もない頃はビスラマ語がうまく使えず、同じ学校の先生に教えてもらいながらの作業だったのでとても難しく、長い時間を費やすこととなりました。

(2) 楽器の演奏指導

その学校には JICA から購入していただいたキーボードや前任の方が日本から送ってもらわれた鍵盤ハーモニカ、リコーダーが当初からあったのですが、私の日本の所属校の子どもたちにもバヌアツとのつながりをもってほしいと願い、家庭に眠っている使わなくなった楽器はないかと呼びかけ、それらを送ってもらうことにしました。

その結果、さらに鍵盤ハーモニカやリコーダー、また学校の廃棄処分となるタンバリンやトライアングル、すずといった打楽器も集まり、随分と楽器を充実させることができました。鍵盤ハーモニカも一クラス全員分の台数が確保でき、低学年からの指導を始めることができました。

一年生から指導を始め、どの子ども毎回しっかりと練習することができるようになったことで、子どもたちはどんどん技能を上達させていきました。また、放課後にも一人ひとりのニーズに合わせ、個別に練習できるようなクラブ活動の時間を設けたところ、キーボードで好きな曲の伴奏をしながら歌うことを楽しめるようになる子どもも現れました。

「コードを覚えたい」「楽譜が読めるようになりたい」そんな思いから、音階や音符について学習する指導も始めていきましたが、読譜については日本の子ども同様、苦手意識をもつ子どもたちが多く、効果的な指導法を模索するにとどまりました。

(3) 現地のものを取り入れて

教材開発を進めていく中で、日本や西洋の曲を取り入れているだけで、はたしてよいのだろうかという疑問がわきおこってきました。私の赴任先は州都であったため、各島から仕事のために移り住んできている人たちが多く、その土地代々の文化はほとんど見るできませんでした。赴任校で尋ねても、カスタムソングやダンスを知っている子どもたちは全くと言っていいほどいかなかったのです。せっかくバヌアツには独自のすばらしい文化が存在するのにこのままでは廃れてしまうのではないかと、もっと自分たちの国の文化を大切に、誇りをもって残して欲しい、そんな思いからバヌアツの伝統的な音楽を授業でも取り入れていくことにしました。

そこで、他の島から来ていた先生に自分の島でのカスタムソングを教えてもらい、楽譜に起こしていきました。指導はその先生から直接子どもたちにしてもらったのですが、これは音楽の指導に逃げ腰だった先生にも授業に関わってもらえるよい機会となり、彼女の自信にもなりました。また子どもたちにとっても初めて出会う自分たちの国の伝統的な歌だったので、とても喜んで学習することができました。

(4) 音楽会の開催

「ミュージックナイトを開くので、子どもたちに歌の発表をさせてほしい。」校長からこう頼まれたのはその日の数週間前のことでした。ミュージックナイトとは、夜に開く音楽会のことなのですが、子どもたちのがんばりを発表する場というのではなく、学校運営のための資金集めが目的で、音楽は人集めのために利用するということだったのです。でも、これは子どもたちにとっても周りの人たちにとっても、音楽をより楽しんでもらえる絶好のチャンスだと思い、この機会を大いに活用していくことにしました。そこで、それではよい発表ができないと日を二ヶ月も延ばしてもらい、発表への練習を進めていきました。

4、子どもの変容

(1) 特別な場での発表

ミュージックナイトでは、小学生の各クラスとも歌と合奏の2曲ずつ、中学の3クラスは歌を1曲ずつというようにどの学年も発表できるようにしたのですが、子どもたちは初めのうち、あまり乗り気ではなく、前述のように人前に出ることには戸惑う子も少なくありませんでした。しかし、練習を続けていくに従って子どもたちの意欲は高まり、「もっとやろう!」「もう一回!!」などという声も増えるようになっていきました。それまであまり気にしていなかった休符や終わりをぴったりそろえることなどにも意識が高まり、全員の息がそろったときには自分たちで拍手をして喜び合えるようにもなりました。

また高学年の児童や中学生の中からは、個人で歌いたいという声も現れ、一人でステージに上がることを自ら希望する子どもも現れました。もともと楽器の演奏に興味のあった先生たちはこれらの伴奏をしたいと練習を始め、放課後から夜にかけては連日このための練習でずっと音楽が鳴り響くようにさえなっていたのです。

「ミュージックナイトはあと何回寝たら来る?」「考えたらどきどきする!!」

そんな話をしながら子どもたちはその日を楽しみに待っていました。バヌアツでは大変異例なことに、リハーサルを3回も行い、本番に臨みました。

そして迎えた当日、州で一番大きな野外ステージがその発表の場となり、中学生たちはたくさんのお花で会場を飾り、先生たちはどこからか照明器具を借りてきて雰囲気盛り上げてくれました。発表する子どもたちもはりきって衣装を工夫したり、いつもよりおしゃれをしてステージの上に登場。このような行事であっても来たり来なかったりする子どもたちですが、この日は自分の意思で全員参加していたことが、何よりうれしかったです。

ステージの下には島全体、そして他の島々からもうわさを聞いて集まってきた人たちでいっぱいになっていました。子どもたちは、そのたくさんの人たちの前で堂々と前を向き、体

を動かしながら歌ったり友だちと息を合わせて合奏したりすることができたのです。

発表前に緊張していた顔がたくさん拍手をもらって一気にほころび、ステージを降りた後、友だちと飛び跳ねて喜んでいる姿が本当に印象的でした。偶然に何かを得たときの

うれしさとは違う、本当の喜びを味わうことができたのではないかと思います。

一人で歌う中学生たちもマイクを持って、ステージ上で気持ちよさそうにリズムにのりながら歌い、その下では子どもたちや会場に来ていたひとたちもいっしょに踊りながら聴き入っていました。会場はまさしくダンスパーティ、この大盛り上がりは深夜まで続いていきました。

(2) 見通しを持って練習することの大切さ

子どもたちがこれだけの変容を遂げたのは、大きな会場での発表という特別な場が子どもたちの気持ちを高揚させたということもあったかもしれませんが、やはり大きな要因は、それまでの過程にあったのではないかと思います。

バヌアツでは、学校や国の行事であっても思いつきのように何かが始まってなんとなく終わってしまうことが少なくありませんでした。「明日、州知事がやってくるので歓迎の歌を歌ってほしい。」「今日は村の祭りで授業はやめ。」などと突然言われることが何度あったかわかりません。入学式もなければ、卒業式もなく、運動会のようにみんなで力を合わせてがんばるような行事もありません。見通しを持って何かに向かって努力し、達成する喜びが得られるような経験をこれまでバヌアツの子どもたちはほとんどしたことがなかったのではないのでしょうか。またスクールフィーが払えないなどの理由で、学校に行くことが途中でできなくなってしまふ子どもたちも少なくない状況の中で、自分の思いを大切に最後までがんばることよりも、周りの状況に合わせてあきらめていくことの方が自然と身についてしまったのかもしれません。

初めに見た自信をもてずに下を向いていた子どもたちの姿は、決して表現することが苦手であつたり嫌いであつたりするわけではなく、自信をもてるような経験を積んでこなかったためであり、社会のしくみや学校での教育の不十分さのしわよせではないのだろうかと考えています。言い換えると、子どもたちが何かに向かっていっしょうけんめいに練習を続け、それが達成できたとき、子どもたちは自信をもって自分を表現することができるのではないのでしょうか。それは、どの国の子どもであっても同じだと思います。

5、つきない悩み

こうして、順風にのったように思えた音楽教育でしたが、そううまくいくものではありませんでした。ミュージックナイトの成功で予想以上の資金が集まったことに先生たちは満足してしまい、また音楽の授業へは見向きもしてくれなくなりました。先生たちにとって、音楽はお金を集める手段でしかなかったのです。このときすでに、私を要請した校長は異動し、音楽教育の意義など考えようとしなない校長へと変わっていたので、他の先生たちも同じような考えに変わっていました。声を掛けても家に帰って寝てしまう先生たちの姿に、このままバヌアツで音楽を教えていてもいいのだろうか、隊員が帰国したらもう学校での音楽は存在

しなくなるだろうし、そんな中でわずかな期間だけ授業を行っても、意味などないのではないだろうか...そんなことさえ考えるようになってしまいました。

それでも、子どもたちはあのとき得た自信と喜びから、もっと音楽の学習をしたいという思いをもっていたので、子どもたちに対して自分のできることをやるしかない、活動を進めていきました。しかし、授業をするにも、新しい教材を見つけ出すのに限界がきてしまい、子どもたちの意欲に相反して、満足できるような授業が提供できないのではないかと気持ちはどんどん焦っていくのでした。

その一方で、ミュージックナイトを見に来ていた他校の先生たちから、うちの学校にも音楽を教えにきてほしいという依頼があり、巡回指導を増やしていきました。一人でも多くの子どもたちに音楽の楽しさを知ってほしいという思いから、四校で指導をすることにしましたが、ここでも大きな問題がありました。それは交通手段です。近隣校を選んだとは言え、車でも20分~40分間ほどかかるところにある学校なので、楽器を担いで歩いていくわけにはいきません。しかし、その車というのはいつ通るかわからない乗り合いのトラックなので、道端で延々と待つしかないのです。伴奏用の大きなキーボードと児童用の鍵盤ハーモニカを両脇にかかえながら、あるときには3時間も待ち続け、学校に着いたらもう子どもたちはすでに帰っていたということもありました。電話もなく連絡のしようもなかったので、この巡回指導は続けていくのがとても困難でした。

6、それでもやっぱり広めたい！

(1) ねらいの再確認

こんなとき、首都で隊員総会があり、音楽部での話し合いの場ももたれることになりました。当時小学校で音楽を指導していたのは私を含め5人だけだったのですが、島も異なっていたので普段は会うこともなく、いっしょに活動することはありませんでした。しかし、このときそれぞれの任地での活動状況を報告しあう中で、5人が同じような悩みをかかえていることがわかりました。「先生たちは少しも音楽の授業に理解を示してくれない。」「もうよい教材が見つからない。」「隊員のいない学校では音楽の授業がされていないのに、いるところだけでどんどん進めていっていいのか。」「人々は音楽の楽しさを知っているし、歌も日常的に歌っている。音楽教育の必要はないのではないか。」「このままバヌアツで音楽教育を続けていく意義があるのだろうか。」「...そこで、私たちはもう一度自分たちがこの国へ来た意味を考えながら、『音楽教育のねらい』について考えていくことにしました。

< 音楽の授業を通して、バヌアツの子どもたちにどんな力をつけたいか >

- 1、 表現力...声や全身で自分の思い・感情を表せるように
- 2、 音楽的な能力...高まった方がより楽しさを味わえる
- 3、 集中力...最後までがんばる力のもととして
- 4、 自信をもつこと...できる喜びは自分を高める意欲につながる

バヌアツの文化、民族への誇り

音楽教育は、子どもの人生を豊かにする

- ・子どもたちの心を開放し、楽しい時間をもつことができるようにする
- ・達成感や満足感を味わうことができるようにする
- ・みんなで声や息や心を合わせて、一つのものを作り出す喜びを味わうことができるようにする
- ・自分の可能性を広げることができるようにする

このような確認をしあい、やはりどの子どもにも音楽教育が受けられるようにしたいという思いを改めてもつことができました。そしてそのためには、隊員がいないところでも、帰国してからも音楽の授業が行われることが必要であり、バヌアツの先生たちが自分たちで授業を進めていけるようにならなければならないということがはっきりと見えてきました。そして、どの先生たちも音楽の授業をすることができるようになるには、指導の手引きとなる指導書とカリキュラムの整った教科書が不可欠であることを確認しあいました。

(2) 教科書づくり

そこで私たちは、バヌアツ全体で使うことができるように教科書作りをすることにしました。以下にその手順をしめします。

| | |
|----------------|---|
| アンケートの作成・実施・集計 | 自分たちの思いだけで進めてしまわないよう、現地の先生たちの意見を取り入れていけるようにした。 |
| カリキュラムの作成 | 各学年のねらい・活動内容を明確にし、それにふさわしい曲を集めて配列を考えていった。(歌唱・楽器演奏共) 日本や西洋の曲だけでなく、バヌアツの文化も取り入れていけるようにした。 |
| 教材の収集・作成 | 楽譜を集め、ないものについては自分たちで作成した。 |
| 指導法の明記 | 初めて音楽を指導する先生たちにもこれさえ見れば進めていけるよう、1時間の授業の流れや歌や演奏の指導のしかた、音符の読み方や指導法などを明記した。 挿絵を多くし、わかりやすく親しみやすいものにした。 |
| 教育省との連携 | 英語版・フランス語版の両方を作成し、どの学校でも使えるものにした。各指導の説明はビスラマ語で記述した。 自分たちの思いを教育省にも伝え、音楽教育に対する協力を求めた。 |
| 印刷・製本 | できるだけ低コストで製本できるよう業者に掛け合った。 |
| 範唱テープの作成 | 楽譜が読めない先生たちや初めて出会う子どもたちのために各校で歌を録音し、学年ごとの範唱テープを作成した。 |

作業は5人で分担し、Eメールで連絡を取り合いながら作業を進めていきました。長期休業には首都にあがり、ほとんどの時間をこの教科書づくりのために費やしましたが、初めて取り組むことであったので試行錯誤を繰り返し、ようやくできあがったのは約8ヵ月後のこ

とでした。経費の都合で1～6年生の一学期の内容が一冊にまとまった形になってしまったのですが、こうしてできあがった教科書を手にしたときは本当にうれしく、自分たちも達成感を得ることができました。

そして、これをバヌアツの先生たちに広めていくために教育省でワークショップを開き、教育省の役人や教員養成校の校長、各校の先生たちなどに参加してもらって、音楽教育のねらいや教科書のよさ・使い方などをアピールしていきました。

(3) 先生たちによる授業

できあがった教科書をさっそく任地へ持ち帰り、先生たちの理解を得るために校内でのワークショップを開きました。音楽教育のねらいと必要性、そして先生たちによる指導がいかに重要であるかということ、まずは授業に参加してほしいということを伝えました。

先生たちもこの教科書に興味を示し、これなら自分にもできそうだと授業へも参加してもらえるようになりました。そして、事前に打ち合わせをし、少しずつ指導を進めてもらえるようになっていったのです。

先生たちも本当は音楽が好きで、教えることができるようになりたいとの思いを持っていたのですが、自分も音楽の授業を受けたことがなく、どのようにしていけばよいかわからなかっただけなのだということがわかりました。こうして手引きとなるものがあり、いっしょに授業を作っていくことができるようになると、次は自分で伴奏ができるようになりたいので教えてほしいと意欲を高めていく先生もいるほどでした。

子どもたちも真新しい教科書を手し、目を輝かせてページをめくっていきました。楽譜はまだまだ読めませんが、音楽を学習する気分十分にひたっていた子どもたちです。

7、帰国にあたって

このようにして一学期分の教科書を作成したところで、私の任期は終わることになりました。できることなら延長して、もっともっと子どもたちとも先生たちともいっしょに学習を進めたかったのですが現職参加制度で参加させていただいているため、かなうことはできませんでした。十分な活動はできませんでしたが、自分なりにはできることをがんばったつもりです。しかし、胸を痛めるだけで自分にはどうしようもないこともたくさんありました。その一つが学校に来ることのできない子どもたちのことです。すべての子どもたちに音楽の楽しさを味わってほしい、音楽で自分の可能性をもっと伸ばしてほしい、そう思っても、学校に来ることができなければどうしようもありません。音楽だけではなく、すべての子どもが学ぶ権利を持っているのに、それが守られていないなんて・・・

帰国前にはお世話になった教育省や政府へもあいさつにいたり、新聞社からの取材を受けたりする機会に恵まれました。私はそこで、バヌアツで本当にたくさんの方々に支えていただいたこと、とても楽しく有意義な時間を過ごさせていただいたことへのお礼を述べると共に、すべての子どもたちが学校で勉強することができることを願ってバヌアツでの義務教育制の確立を求めました。どの子どもも目を輝かせて笑顔いっぱいたくさんのことを勉強したいのです。他国からやってきた一隊員がえらそうに言えることではないのですが、あき

らめずに声を出していくことで少しずつ変わっていくものがあることをこの国で学ばせていただいたので、どうしても伝えたいと思ったのでした。

8、おわりに

自分ができたことはほんの小さなことでしたが、バヌアツで学んだこと、人々から教えていただいたことはずっとずっと大きかったと今でも思っています。

帰国後は、たくさんのクラスや学校から依頼を受け、バヌアツの話をする機会に恵まれました。バヌアツの人々、子どもたちの笑顔をいつも思い浮かべながら、少しでも日本の子どもたちがバヌアツのことを好きになってくれたらいいな、バヌアツの人たちへ思いを寄せて気持ちを近づかせることができたらいいな、他の国々の人々に対しても、同じ地球のなかまとして大切に思う気持ちが芽生えればいいな...そんな思いで話していきました。

ありがたいことに、筑波大学の先生方の全面的なご協力を得て、インターネットライブ授業に取り組みさせていただく機会にも恵まれました。やはり、生で相手の顔が見えることや、声が聞こえてくることは、私の説明をはるかに超えて子どもたちの気持ちをバヌアツへと向かわせました。いっしょに一つの歌をうたったことは日本の子どもたちにとっても本当に感動的な体験で、「心がつながった！」という思いにもつながりました。

海を越え、遠く離れた国にいる子どもたちともつながっているという感覚は、その人たちのことを大切にしたいという気持ちにもつながっていくものだと思います。どの国に住むどんな人たちも自分たちと同じなかま、どの人のことも大切にしたいという思いは、国際協力の面だけでなく、生きていくなかで最も大切なことのひとつだと思います。

すべての子どもたちがいつも笑顔でいられること、自分を大切にし、自信をもって自分の力を発揮していけること、そしてまわりの人たちを大切にし、ともに歩いていけること

・・・小学生のときに見た映像とバヌアツで出会った子どもたち、そして今いっしょに過ごしている日本の子どもたちは、この願いに向けて自分のできることを進めていくことの大切さを今も毎日教えてくれています。子どもたちの笑顔に支えられて、毎日の自分の仕事があるように、自分のできることを一つずつやっていくことで子どもたちに少しでも返していけるよう、努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださり、支えてくださったすべてのの方々に感謝します。本当にありがとうございました。

すべての子どもたちに笑顔と自信とつながりを
～音楽教育活動を通して出会った子どもたちから～

14年度1次隊 バヌアツ共和国派遣
滋賀県草津市立老上小学校
枝重 美香



















発表はDV(デジタルビデオ)を用いて行われました。この資料は、DV画面をもとにスライド風に編集しなおしたものです。

すべての子どもたちに笑顔と自信とつながりを

～音楽教育活動を通して出会った子どもたちから～

14年度1次隊 バヌアツ共和国派遣

滋賀県草津市立老上小学校 枝重美香

- 1、 バヌアツの子どもたち
 - ・たくましい生活力
 - ・とてもシャイ・・・自信がなくてあきらめがち
 - ・音楽大好き！
- 2、 バヌアツの音楽
 - ・村ごとのカスタム
 - ・教会での合唱
 - ・ストリングバンド・・・楽器へのあこがれ
 - ・学校での位置づけ・・・芸術教科の中のひとつ
- 3、 任地での活動
 - ・赴任校（小中学校）での音楽科の授業
 - ・放課後のクラブ活動
 - ・近隣の小学校への巡回
 - ・先生たちへの技術移転
 - ・音楽会の開催
- 4、 悩み続出・・・
 - ・教材開発の難しさ
 - ・教室にこない先生たち
 - ・巡回の厳しさ
 - ・音楽教育への疑問
- 5、 教科書づくりへ
 - ・隊員での話し合い・・・音楽教育の必要性 やっぱりひろめたい！
 - ・アンケート作成
 - ・教育省との話し合い
 - ・教材収集
 - ・教師用指導書
 - ・ワークショップ
- 6、 帰国にあたって
 - ・歌集の作成・配布
 - ・お礼と願い
 - ・宣伝活動
- 7、 帰国後の活動
 - ・きっかけづくり
 - ・歌を通じた交流
 - ・「つながり」を感じることに